『三玉挑事抄』注釈　雑部（二）

岩坪　健

本稿は『三玉挑事抄』雑部の579番から634番までを掲載する。担当者はすべて本学博士課程前期課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（　）内には、担当者の氏名を示した。

玉越雄介、山内彩香、梅田昌孝、藤原崇雅、永田あや、太井裕子、倉島実里、増井里美

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

1　句読点を付け、会話文などは「　」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。

2　誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。

3　和歌の上に、通し番号（579～634）を付けた。

一、［出典］の欄には、和歌と注釈本文の典拠を示す。和歌には『新編国歌大観』の歌番号（万葉集は旧番号のみ示す）を記すが、無い場合は「該当歌なし」と表記し、『三玉和歌集類題』にあれば部立などを示す。注釈本文が

『新編日本古典文学全集』（小学館。略称『新編全集』）、または『新釈漢文大系』（明治書院）に収められている場合は、そのページ数も記載する。

一、［異同］の欄には、翻刻本文との異同を列挙する。ただし、濁点や送り仮名の有無、漢字と仮名の相違は取りあげない。和歌の本文は『新編国歌大観』と、注釈本文は原則として版本と、それぞれ比較する。異同がない場合は「ナシ」と記し、ある場合は『三玉挑事抄』の本文―異文の順に列挙する。複数の作品すべてに異同がない場合は、書名をまとめて列挙して、末尾に「ナシ」と記す。

○源氏物語は、絵入り承応版本（略称『承応』。国文学研究資料館のホームページに公開）と、北村季吟『源氏物語湖月抄』（略称『湖月抄』。『北村季吟古註釈集成』新典社を使用）による。

○伊勢物語・大和物語・枕草子・古今集序・八代集・和漢朗詠集は、『北村季吟古註釈集成』（新典社）による。

○竹取物語は絵入り版本（無刊記版。同志社大学所蔵）による。

○うつほ物語は文化三年（一八〇六年）補刻本、狭衣物語は承応三年（一六五四年）版本により、いずれも三谷栄一『平安朝物語板本叢書』有精堂を使用する。

○漢籍も同志社大学に版本がある場合は、それを用いる。ない場合は『新釈漢文大系』などによる。

一、［訳］の欄には翻刻本文の現代語訳、［考察］の欄には和歌と典拠との関係など、［参考］の欄には参考資料などを記す。

一、歌題が同じである和歌が連続する場合、底本では二首めからの歌題は省略しているが、本稿では［訳］に限りすべての歌に題を示した。ただし補足した歌題には（　）を付けて、底本にはないことを示す。

579 柏
初瀬山もろこしまでもあはれひの深きをわきてたのむとそ聞

玉かつらの巻云、「初瀬なん、日の本にあらたなるしるしあらはしたまふと、もろこしにも聞え有也」云々。河海抄引縁起曰、僖宗皇帝の后馬頭夫人（文宗孫玄成太子女）かたちのみにくき事を歎き給けるに、仙人の教によりて東に向て日本国長谷寺の観音に祈請し給けるに、夢中に一人の貴僧、紫雲にのりて東方より来て、手をのへて瓶水を面にそゝくとみて忽に容貌端正になりにけり云々。下略

［出典］該当歌なし。源氏物語、玉鬘巻、一〇四頁。河海抄（玉上琢彌編、角川書店）、玉鬘巻、三八七頁。

［異同］『承応』『湖月抄』「日の本に―日の本のうちには」「もろこしにも―もろこしにだに」。『河海抄』ナシ。

［訳］（寺院）

唐土の人々までもが、初瀬山の観音の深いお慈悲を、とりわけ頼みにしていると聞くことだ。

玉鬘の巻によると、（豊後介が言うには）「初瀬の観音が、日本にあらたかなご利益をお示しになると、唐土でさえ評判になっているそうです」云々。

河海抄に引く縁起によると、僖宗皇帝の后馬頭夫人（文宗の孫。玄成太子の娘。）が容貌の醜いことを歎きなさっていると、仙人の教えを受けて、東に向かって日本国の長谷寺の観音に祈請なさると、夢の中に一人の貴僧が紫雲に乗って東方から来て、手を伸べて瓶水を馬頭夫人の顔に注ぐと見るや、たちまち美しい容貌なった云々。下略

（太井裕子）

580
初瀬山かけてそあふく藤原の花のさかへもしるし有きと

河海抄云、徳道上人長谷寺建立之時、藤原房前卿奏聞助成之間、彼聖人聖朝安穏藤氏繁昌乃至、法界衆生の為

に祈請之由、見縁起云々。

［出典］雪玉集、二三一四番。河海抄（玉上琢彌編、角川書店）、玉鬘巻、三八七頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『河海抄』「聖人―上人」。

［訳］　（寺院）

初瀬山に参詣し、心にかけて仰ぐことだ。藤の花が盛りであるように、藤原氏の栄えも徳道上人が祈ったとおり、ご利益があったと。

河海抄によると、徳道上人は長谷寺建立の時に、藤原房前卿が奏聞し助成している間、その聖人は聖朝が安穏で藤原氏が末永く繁昌して、法界衆生の為に祈請したということが縁起に見える。

［考察］当歌は、初瀬山の参詣で藤の花が咲き誇る様子を見て、徳道上人が藤原氏の繁栄を祈った逸話を思い出したもの。

（太井裕子）

仏寺

581よのつねのふり行寺の仏のみかはらぬかさり光そひつゝ

椎本巻云、塵いたうつもりて仏のみそ花のかさりおとろへす云々。

［出典］柏玉集、一七二〇番。源氏物語、椎本巻、二一二頁。

［異同］『新編国歌大観』「かさり―かぎり」。『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　仏寺

時が移ろうことは常のことであるが、古寺の仏だけは供養の花の飾りが、変わることなく光り輝いていることだ。

椎本の巻によると、塵がたいそう積もって、仏前だけは供養の花の飾りが以前と変わらない云々。

［考察］『源氏物語』は、八の宮の亡き後、塵が積もり、花の飾り以外は変わってしまった宮の居所の様子を描いた場面。当歌は「ふり」に「年を経る」と「古くなる」を掛けて、過ぎ行く時の無常さと仏の普遍性を対比的に詠む。

（倉島実里）

古寺滝

582いまみるも何山姫のさらすともしられぬ布を風や吹らん

伊勢集云、龍門といふ寺にまふてゝ、む月の十日あまりになん有ける。みれは其堂の有さま、滝は雲の中よりおち来るやうにみゆ。仙のいはやといふは、いたく年ふりて、いはのうへの苔、八重むしたり。あはれにたふとくおほえて、なみたおつる瀧におとらす云々。たちぬはぬきぬきし人もなき物を何山姫の布さらすらん。

［出典］雪玉集、二三三二番。伊勢集（正保四年刊歌仙家集）、七番。

［異同］『新編国歌大観』「布を風や吹らん―布の風を吹くらん」。『伊勢集』「年ふりて―年つもりて」。

［訳］　古寺の滝

どうして今見ても、かの山姫が晒したかどうかも分からない布を、風がなびかせて吹いているのだろうか。

伊勢集によると、龍門という寺に参詣したのは、一月十日あまりのことであった。見るとその堂の様子は、滝が雲の中から落ちてくるかのように見えた。仙の岩屋というのは、たいそう長く年を経て、岩の上に深く苔むしていた。感慨深く尊いと思われて、感動の涙は瀧にも劣らない云々。「裁ち縫うことをしない衣を着たとい

う、あのいにしえの仙人たちはもういないのに、どうして山の女神は、このように今も布をさらしているのだろう」。

［考察］当歌は『伊勢集』の歌を踏まえ、瀧を山姫が晒した布に譬えたもの。

（倉島実里）

寺近聞鐘

583 柏 おもふにも瓦の色にかねの声みるやさひしき聞やかなしき

都府楼ハ纔ニ看二瓦ノ色一、観音寺ハ只聴二鐘声。

［出典］柏玉集、一七一一番、一九九三番。菅家後集、不出門。和漢朗詠集、下、閑居、六二〇番。

［異同］『新編国歌大観』「瓦―尾上（一七一一番）―をのへ（一九九三番）」「聞くや―夢や」。『菅家後集』『和漢朗詠集』ナシ。

［訳］　寺の近くで鐘を聞く

思ってみると都府楼の瓦の色は見ても寂しいだろうか、観音寺の鐘の音は聞いても悲しいだろうか。

大宰府政庁の楼門は、わずかに瓦の色を眺めるだけだ。観音寺も、ただ鐘の声を聞くばかりだ。

［考察］当歌は、太宰府に左遷された菅原道真の漢詩を典拠として、その地で虚しく生涯を終えた道真のつらい心情を思いやり詠まれたもの。

（倉島実里）

野寺僧帰

584分かへる袖さむからし月の下の門は野かせの吹にまかせて

賈嶋。鳥ハ宿ス池ノ辺ノ樹。僧ハ敲ク月ノ下ノ門。

［出典］雪玉集、三三四三番。詩人玉屑。［異同］『新編国歌大観』『詩人玉屑』ナシ。

［訳］　野の寺に僧帰る

風の中を進んで帰る僧の袖は、寒いことだろう。月に照らされた門は、野風に吹かれたままで。

賈島の詩。鳥は池の辺りの樹に宿り、僧は月の下の門を敲く。

［考察］「推敲」の出典は、五代・後蜀の何光遠『鑒戒録』巻八・賈忤旨が初出。宋・胡仔『苕渓漁隠叢話』や宋・魏慶之『詩人玉屑』などによると、唐の詩人である賈島は「僧推月下門」の句を作ったが、「推」を「敲」に改めた方がよいかどうか苦慮して韓愈に問い、「敲」に決したことにより「推敲」という言葉が生まれた。当歌の第二句「袖さむからし」は「さむからじ」ではなく「さむかる・らし」の「る」が脱落したと解釈した。『詩人玉屑』の本文は、早稲田大学の古典籍総合データベースによる。

（藤原崇雅）

山家橋

585出しとはちかふとなしに打わたしいつかは過し谷の板はし

［出典］雪玉集、五六八〇番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　山の家の橋

出るまいと誓った訳でもないが、ずっと谷に架かっている板の橋を、いつ通り過ごしたのだろうか。

［考察］典拠は586番の「虎渓三笑」の故事に同じ。「打わたし」は副詞「うちわたし」（ずっと続いて）と橋を「渡す」とを掛ける。

（藤原崇雅）

寄橋雑

586谷ふかみ橋を過しのちかひたにあれは有世をなとわたるらん

［出典］雪玉集、二五九九番、七三六三番。廬山記、仁、第一巻、叙山北篇第二。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『廬山記』「遠法師居二廬阜一、三十余年影不レ出レ山ヲ、跡不レ入レ俗。送レテ客ヲ過二レハ虎渓一ヲ、虎輙鳴号。昔シ陶元亮渓一ヲ、虎輙鳴号。昔シ陶元亮—虎渓昔遠師送客過此虎輙号鳴故名焉時陶元亮」。

［訳］　橋に寄せる雑の歌

谷が深いので橋を通り過ぎないでおこうという誓いさえある世の中なのに、なぜ世渡りをするように橋を渡るのだろうか。

廬山記によると、遠法師は廬の小高い丘に居り、三十余年も山を出たことがなく、俗界に入ったためしがなかった。客を送って虎渓を過ぎたところで、虎の吠える声がした。昔、陶元亮は栗の里に居て、山の南にいる陸脩静もまた道士である。遠法師はかつてこの二人を送ったとき、あまりに話が合い、語り合ってしまったた

め、不覚にも境界線を過ぎたことに気づき、互いに笑い合った。今の世には、この挿話は三笑の図として伝わっている云々。

［考察］「遠法師」は中国東晋の僧、慧遠。廬山の東林寺に住み、白蓮社を創設し、中国浄土宗を開いた。陶元亮は陶淵明の字。陸脩静は東晋末～南朝宋の道士、陸修静。虎渓は廬山に流れる川の名前で、俗世との境界とされていた。

［参考］『廬山記』は国立公文書館デジタルアーカイブ所収の内閣文庫による。

（藤原崇雅）

山家路

587君かためいまも道有しるへして出へきあきの山人もかな

漢書。張良伝曰、良曰、「始上数在二急困ノ之中一ニ。幸ニ用二臣カ策一ヲ。今天下安定ナリ。以レ愛ヲ欲レ易二太子一ヲ。骨肉ノ之間、雖二臣等百人一、何ノ益カアラン」。呂沢彊要シテ曰、「為レ我画計セヨ」。良カ曰、「此難下以二口舌ヲ争上。顧フニ上有二所不レ能レ到スコト者四人一。四人謂、園公、綺里季、夏黄公、角里先生、所謂商山四皓也。四人年老タリ矣。皆以二上ノ嫚侮セルヲ士ヲ、故ニ逃匿山中一ニ。義不レ為二漢ノ臣一ト。然上高シトス此ノ四人一ヲ。今公誠ニ能毋レ愛コト二金玉璧帛一ヲ。令レ太子ヲ為レ書、卑レ辞ヲ、安車シテ、因使シテ弁士ヲ固ク請ハ一、宜シク来タス。以為レ客、時従入一朝セシメン。令シテ上ヲ見レ之ヲ、則一ノ助ナリ」。於レ是呂后、令シテ呂沢ヲ使レ人ヲ奉二太子ノ書一ヲ。卑レ辞、厚ノ礼ヲ迎二此ノ四人一ヲ。四人至客タリ二建成侯カ所一ニ云云。

［出典］雪玉集、二三四四番。漢書（高木友之助・片山兵衛『中国古典新書続編　漢書列伝』明徳出版、一九九一年）、張良伝、一二二頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『漢書』「以口舌争―以口舌争也」「宜レシク来タス。以為レ客―宜来来以為客」「則一ノ助ナリ―則一助也」。

［訳］　山家の路

主君のために今も進むべき道案内をして、商山の四皓のように山から出て来る賢者がいればなあ。

漢書の張良伝によると、張良は、「昔、帝（劉邦）はしばしば急困された時、運よく私の策を用いられました。しかし、今天下は安定しており、愛憎から太子を代えようとなさるのは、肉親の情としての問題であります。私のような者がたとえ百人いたとしても、役に立たないでしょう」と言った。しかし、呂沢は無理強いして、「私のために計画せよ」と迫った。そこで、張良は次のように助言した。「これは言葉だけでは扱い難い問題です。思うに、帝でもお呼びできない四人の賢者がおります。その四人とは、園公、綺里季、夏黄公、角里先生のことで、いわゆる商山の四皓と呼ばれる者たちです。四人は年老いて皆、帝が士を侮蔑するのを敬遠して山中に隠れ住み、筋を通して漢の家来になろうとしておりませんが、帝は彼らを高く評価しています。今、あなたが金に糸目をつけないで、太子に手紙を書かせ、礼を尽くして老人達が座れるように車を作るなどの配慮をして能弁の士に招かせれば、彼らも多分来るでしょう。もし来ましたら、上客として丁重に遇し、折を見て参内して帝に見えさせてください。そうすれば助けになるでしょう」。そこで呂后は呂沢に頼み、使者を通じて張良の言葉通りにさせ、この四人を迎えることができた。四人は来朝し、建成侯（呂沢）の客になった。

［考察］『漢書』張良伝は、正室呂后の産んだ太子を廃位させようとする劉邦に対抗して、呂后が張良に策を授けさせる場面。「あきの山人」は商山の四皓を指す。

山家松

588 朝夕の烟もたてし柴の庵松の葉すきてあるにまかせは（柏）

若紫の巻に、さるへき物つくりてすかせ奉る云々。

孟津抄云、すかせは食也（スカス）。松のはすきてなとおなし事也。

［出典］柏玉集、一七四一番、二四二九番。源氏物語、若紫巻、二〇〇頁。

［異同］『新編国歌大観』『承応』ナシ。『湖月抄』「松のはすきて―松の葉をすきて」。

［訳］　山家の松

あの粗末な柴の庵では、朝夕の食事のための煙も立てないのであろう。松の葉を食べて、あるにまかせて暮らしているので。

若紫の巻には、しかるべき護符などを作って、お飲ませ申しあげる云々。

孟津抄によると、「すかせ」は食べるという意味である。「松の葉すきて」などと同じことである。

［考察］『源氏物語』若紫の巻は、光源氏が瘧病で北山を訪れた場面。当歌は、炊事をしないので煙も立てない質素な山の家の生活を、仙人のように松の葉を食べて暮らしていると詠んだもの。

［参考］『新編国歌大観』では「松の葉すぎて」と翻刻されている。

（増井里美）

山家

（増井里美）

589住人はいかゝ見るらん雲は猶こゝろなくても出る山かせ

雲無心ニシテ以出レ岫ヲ。帰去来辞。

［出典］雪玉集、三七四八番。文選（文章篇）中、四五四頁。［異同］『新編国歌大観』『文選』ナシ。

［訳］　山家

雲はやはり無心であっても山中からわきおこり、風に吹かれて流れ出るが、（その様子を）山人はどのように見ているだろうか。

雲は無心に山中の洞穴を出て。帰去来辞。

［考察］当歌は無心の雲でさえ山から出るのを見て、有心の人間は山人であっても外に出たいと思うだろうか、と詠んだもの。

（玉越雄介）

590おなしくはおとろの道の奥もみて身のかくれ家の山はさためん

棘路註、見于秋部。

［出典］雪玉集、二三三二五番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　（山家）

どうせ出家するのであれば、公卿としての出世の道を極めた後に、我が身の隠れ家とする山を定めよう。

棘路の註は秋部に見える。（161番歌、参照）

［参考］原露　161跡とめておとろの道のおくまても露分みはや春日野の原　周礼、左九棘公卿大夫、位レシ焉ニ群士在ニ其ノ

後二、右九棘公侯伯子男、位レシ焉二群吏在二其ノ後一。拾芥抄唐名部曰、大中納言通用棘路。新古今集、俊成卿、春日山おとろの道の埋れ水すゑたに神のしるしあらはせ

（玉越雄介）

591深くいとふ身のかくれかの道なくは洞にもはつる心ならまし

［出典］雪玉集、五四九七番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　（山家）

この世を毛嫌いする私に出家する手段がもし無ければ、山の洞穴に対しても恥ずかしく思う気持ちが起こるだろうが。

［考察］592番歌と同様に「北山移文」を踏まえて、山に恥じられないよう熱心に修行する強い意志を詠んだ歌。

（玉越雄介）

雑歌中

592ふかく入てすまぬ心を谷にはち林にはつる身のやとりかな

北山移文。故二其ノ林ノ慙無レ尽ルコト、澗ノ愧不レ歇。註翰曰、託二林一澗一以申二其ノ愧一ヲ也。

［出典］雪玉集、四四四三番。文選（文章篇）中、三五五頁。六臣註文選、巻四三。古文真宝後集、二六九頁。

［異同］『新編国歌大観』『文選』『六臣註文選』『古文真宝後集』ナシ。

［訳］　雑歌の中

奥深い山へと入っても心を澄ますことができず、谷や林に恥じつつも留まっている我が身であることよ。

北山移文。林の恥じることは尽きず、澗（たに）が恥じることも尽きない。李周翰の注によると、林や澗が恥じるのにことよせて、彼の恥を告白するのである。

［考察］孔稚珪が著した『北山移文』は、官途に就くために隠逸の志を捨て、この地を去る周顒を、北山の神霊が非難するという形式を採る。この場面は周顒に向かって山や谷が笑い嘲り非難し、林や澗が恥じている場面。

（玉越雄介）

山家

593よるの鶴の思ひやそはむ今はとて住へき山の松のかせにも

白氏文集、五絃弾。第三第四絃冷々、夜鶴憶子篭中鳴。

［出典］雪玉集、四六四一番。白氏文集、巻三、新楽府。

［異同］『新編国歌大観』『白氏文集』（那波本）ナシ。

［訳］　山家

夜の鶴のような、私の我が子への思いはいっそう募るのだろうか。今となっては世を捨てて住むつもりの山で、松に吹く風の音を聞くにつけても。

白氏文集、五絃弾。第三、第四の絃は冷え冷えとした音を奏で、夜の鶴が子を思って篭の中で鳴くようである。

［考察］当歌は『新古今集』の四七三番歌も踏まえて、俗世から離れても、我が子に対する親としての愛情が、松風の音によってかき立てられてしまう心情を詠んだもの。

［参考］「虫の音も長き夜あかぬ故郷になほ思ひ添ふ松風ぞ吹く」（新古今集、秋下、四七三番、藤原家隆）

（永田あや）

山家雨

594ゆふまくれ軒はの山にかへりくる雲もそのまゝはれぬ雨かな

［出典］雪玉集、二三三三番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　山家の雨

夕暮になると、（いつもは）軒のすぐ先に見える山に帰ってくる雲も、（今夜は）そのまま晴れずに雨が降ることだ。

［考察］典拠は595番歌に同じ。

（永田あや）

山家

595しつかなるわか身ひとつの谷の戸を隣ありとや雲かへるらん

雲帰而岩穴瞑。酔翁亭記

［出典］雪玉集、三八四二番。古文真宝後集、一六五頁。

［異同］『新編国歌大観』「わか身―たゝ身」。『古文真宝後集』ナシ。

［訳］　山家

静かな一人身でいる谷の入り口を、仲間がいると思って雲が帰ってくるのだろうか。

（日が暮れると）雲が山に帰って岩穴が暗くなる。酔翁亭記

［考察］「酔翁亭記」は北宋の政治家である欧陽脩の著書。典拠は、朝夕に山を漂う雲を擬人化して、朝に山を出て夕方に帰ると形容した箇所。当歌は、雲が谷へ帰ってくる理由を推察したもの。「谷の戸」は谷の入口の意。

（永田あや）

山家経年

596柏 山住は身をやつしても身そやすきはちおほからん命長さの

荘子。見于秋部。

［出典］柏玉集、一七五〇番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　山家で年を経る

山に住むと、その身がみすぼらしくなっても心は穏やかである。長生きして恥が多くなることに比べると。

荘子。秋部に見える。（206番歌、参照）

［考察］『荘子』は、長生きすると恥をかくことが多くなることを記した部分。当歌は、長生きをして恥が多くなるよりは、身をみすぼらしくしても、山に隠居する方が安らかである、という山に住む利点を詠んだもの。

［参考］『三玉挑事抄』秋部　在明月　206おもへとも命なかきは有明のかたはなからに世を尽せとや

荘子天地篇曰、寿キ時ハ則多シレ辱。

597友と成鳥けたものや恨ましなれ来し山を住もうかれは

（梅田昌孝）

［出典］雪玉集、三二一四番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。
［訳］　（山家で年を経る）
　これまで友としてきた鳥や獣は恨むであろうか。馴れ親しんだ山に住むことも辛くなったならば。
［考察］典拠は599番歌に同じ。

（梅田昌孝）

山家嵐

598よるの鶴恨やせまし山さとの松のあらしと住うかれなは

［出典］雪玉集、五三四八番、六五六四番。
［異同］『新編国歌大観』「鶴―露」「山さとの―山ざとを」（五三四八番）「鶴―鶴の」（六五六四番）。
［訳］　山家の嵐
　夜の鶴は恨むだろうか。山里の松の嵐と共に住むことが辛くなってしまったならば。
［考察］典拠は599番歌に同じ。

（梅田昌孝）

隠士出山

599夜の鶴恨かすらん松かせを友なひはてぬ人のこゝろを

　北山移文。蕙帳空兮夜ノ鶴怨ミ、山人去テ兮暁ノ猿驚ク。
［出典］雪玉集、二三六四番。文選（文章篇）中、三五三頁。古文真宝後集、二六八頁。

［異同］『新編国歌大観』『古文真宝後集』ナシ。

［訳］　隠士が山を出る

夜の鶴は恨んでいるだろうか。松風と一緒に住まなくなってしまった人の心を。

北山移文。香りのよい帳は人の姿もなく、夜に鳴く鶴の怨みの声がする。山人は去ってしまい、暁起きの猿は驚く。

［考察］『北山移文』は、周子という隠者が山住みをしなくなってしまったことに対して、夜の鶴が恨み、猿が驚いたということを記す。

（梅田昌孝）

塩屋煙

600 これやこの塩やくならし夕煙月ともいはしすまの浦波

すまの巻。烟のいと近くとき〳〵立くるを、これやあまの塩やくならんとおほしわたるは、おはしますうしろの山に、柴といふもの、ふすふる也けり。

［出典］雪玉集、八〇九四番。源氏物語、須磨巻、二〇七頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　海水を煮て塩を作る家から出る煙

これこそあの須磨の浦で、海人が塩を焼いている夕べの煙であろうか。煙で隠れて月が出ているかどうか言えないが。

須磨の巻。煙がすぐ近くまでときどき流れてくるのを、これが海人の塩を焼く煙だろうと、これまでずっと思

っていらっしゃったのは、じつはお住いの後ろの山で柴というものをくすべているのだった。

［考察］『源氏物語』は、須磨へ退居した光源氏が、流れてくる煙を見て古歌「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（古今集、恋四、七〇八番、題しらず、読人しらず）を思い起こす場面。

（山内彩香）

窓竹

601 柏 竹くらき窓にそおもふたか宿にふみのなにおふ草もおひけん

［出典］柏玉集、一六〇六番、二二九七番。雪玉集、四六三八番。

［異同］『新編国歌大観』「おもふ―おほふ」（一六〇六番）。

［訳］　窓辺の竹

竹の木陰で暗くなった窓辺で、もの思いにふけることだ。誰の家に、文の名を持つ草も生えたのだろうか。

［考察］「文好む木」（梅の古名。好文木）と関係あるか。その名の由来は、晉の武帝が学問に励んでいる時は梅の花が開き、学問を怠る時は散りしおれていた、という故事による。ただし当歌の「文」を手紙と解釈すると、私の家には手紙草も生えないし手紙も来ない、と読める。

［参考］底本には和歌のあと、三行分の空白がある。五四〇番歌の［参考］参照。

（山内彩香）

田家

602 もる庵はいふせけれとも秋の田に色こき稲はにしきをそしく

夕霧巻云、色こき稲ともの中にましりて云々。

［出典］雪玉集、四一四八番。源氏物語、夕霧巻、四四八頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　田舎の家

雨漏りがする庵はうっとうしいけれど、秋の田に実る色の濃い稲は錦を敷いたようである。

夕霧巻によると、（鹿は垣根のすぐ近くにたたずんでは、山田の引板の音にも驚かず）濃く色づいた稲田の中に入り込んで云々。

［考察］『源氏物語』は、夕霧が落葉の宮に会うために小野を訪れた場面。鹿は妻を思って鳴くとされ、落葉の宮を思う夕霧に重なる。

（山内彩香）

木

603 柏 玉つはき春と秋との八千世をも花にそ契る紅葉をは見し

大椿、八千歳。見于秋部。

［出典］柏玉集、一六〇二番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　木

春と秋とが八千年ずつという計りしれない長い時を、大椿の花に約束することだ。そうすれば紅葉を見ることはないだろう。

大椿、八千歳。秋部に見える。（251番歌、参照）

［考察］『荘子』は大椿という木が八千年を春、八千年を秋とするということを引き合いに出した部分。当歌は、椿の花がいつまでも咲き続け、花が散り紅葉となることがないようにと願ったもの。

［参考］菊副齢　251八千とせの秋をよはひの玉椿契りか置し霜のしら菊　荘子曰、有二大椿一云者以二八千歳一為レ春以二八千歳一為レ秋。

（梅田昌孝）

桐

604碧桐の葉は秋にそおつる住鳥もあらはれぬへき君か世の影

格物論。見于秋部。

［出典］碧玉集、五七〇番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　桐

桐の葉は秋になると落ちて、桐に住む鳳凰も姿を現わすように、鳳凰もきっと現れるに違いない我が君の御世である。

格物論。秋部に見える。（142番歌、参照）

［考察］典拠は『円機活法』「飛禽門」鳳凰の格物論。当歌は鳳凰が現れるほど太平である世を讃えたもの。

［参考］早秋　142来る秋もおなし宿りそ一葉ちる枝にのみ住鳥もこそあれ　格物論、鳳ハ瑞応ノ鳥、太平ノ世ニ則見ル非レハ二梧桐一不レ栖。

（永田あや）

洞松

605住すてし人やいく世の石のとこ松のあらしの吹にまかせて

菅三品。石床留レテ洞ニ嵐空ヲ払、玉案抛レテ林ニ鳥独啼。

［出典］雪玉集、一二二五二番。和漢朗詠集、巻下、仙家付道士隠倫、五四七番。

［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

［訳］　洞の松

住んでいた人がいなくなり、捨てられた石造りの寝台は、松を揺らす嵐に吹かれるまま、どれほどの世を経たことだろうか。

菅三品（菅原文時）。仙人の寝台が、洞穴の穴の中に今なお残っていて、山の風が空しくその上を吹きなでるばかりである。また、その玉で作った机は林間に捨てられて顧みられず、ここを訪れるのは悲しげに鳴く鳥の声のみである。

（玉越雄介）

松歴年

606君かへん松は高砂住の江のいく年波かちきりかけまし

古今序の、心詞なるへし。

［出典］碧玉集、一〇六二番。［異同］『新編国歌大観』「君かへん―君かみむ」。

［訳］　松が年を経る

君が過ごすであろう年月は、高砂や住の江の松のように、何年も約束されたことだろうよ。

古今集仮名序の、意味や言葉であるだろう。

［考察］当歌は『古今集』仮名序の「高砂・住の江の松も相生のやうに覚え」（二三頁）という箇所を踏まえる。

［参考］「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世経ぬらむ」（古今集、巻一七、雑歌上、九〇五番）「住の江の岸の姫松人ならばいく世か経しと言はましものを」（同、九〇六番）「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（同、九〇九番）。

（藤原崇雅）

苔

607紅の塵ふみならす跡つけは太山の苔のいとひもそする

円機活法、仕官門、名利部、詩句。貪夫衮々トシテ死二紅塵一。

［出典］碧玉集、二二七四番。円機活法、一二巻、仕官門、名利部。［異同］『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

［訳］　苔

欲深い男が赤茶けた塵を踏みならして跡をつけると、（俗世間からかけ離れた）山奥の苔は嫌がるかもしれない。

円機活法、仕官門、名利部、詩句。貪欲な人物は、名誉と実利の奔流に押し流されて、車馬の行き交い埃だらけの俗世間で死んでゆくのだ。

［考察］「紅塵」は赤茶けた土埃。俗世間を意味する。

［参考］典拠は王若虚『滹南遺老集』巻四五、または元好問編『中州集』巻六に収められた「題淵明帰去来図　五首

其五」の一節。

幽径苔　（藤原崇雅）

608庭の面は山路おほえて石のはしやり水かけて苔生にけり

白氏文集。五架三間新草堂、石階松柱竹編メル墻。

［出典］雪玉集、二二七五番。白氏文集、巻一六、「香爐峯下、新卜山居」、草堂初成。偶題東壁」、四二〇頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』「松―桂」。

［訳］　静かな小径の苔

庭一面は山路のように思われて、石段にやり水をめぐらし、苔が生えているなあ。

白氏文集。奥行きは五架、間口は三間の新しい草ぶきの家、それに石段と松の柱と竹の垣根。

［考察］『白氏文集』は、白居易が、完成した自分の草堂を詠んだ部分。

［参考］源氏物語、須磨巻、二一三頁。「住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階（はし）、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。」

岩頭苔　（藤原崇雅）

609柏さゝれ石の岩ほの苔の行末はをのか緑を松にゆつらん

古今集真名序。砂長シテ為ルノ巌ト之頌、洋々トシテ満リレ耳ニ。

［出典］柏玉集、一六一八番、二〇九四番。古今集、真名序、四二八頁。
［異同］『新編国歌大観』「岩頭苔—巌頭苔」「をのか—おのが」。『古今集』真名序、ナシ。
［訳］　岩の上の苔
小さいさざれ石が大きな巌となり、そこに生えた苔の行く末は、苔の緑色を松の常緑に譲り、永久に栄えるであろう。
古今集の真名序。さざれ石が大岩石になるまでの君のご寿命の長久を寿ぐ歌が、いたる所で我らの耳に満ちている。
［考察］『古今集』の真名序は、その編纂を命じた醍醐天皇の治世を称えた部分。当歌は、古歌「わが君は千代に八千代に細れ石の巌と成りて苔のむすまで」（古今集、巻七、三四三番）も踏まえ、苔の緑色が永久不変を象徴する松の緑に移ると詠み、よりいっそうの長寿や慶賀を寿いでいる。
（増井里美）

松

610我うへにことしそみつる夢の中の松のためしよ世々にかはれる
蒙求云、呉志、丁固仕二孫皓一為二司徒一。呉録ニ曰、初固為二尚書、夢三松生二スト其ノ腹ノ上一ニ。謂レ人曰、「松ノ字ハ十八公也。后十八歳ニシテ、吾ー其レ為レ公ト乎」。卒ニ如レ夢焉。
［出典］雪玉集、五〇三六番。蒙求、王濬懸刀　丁固生松、四九二頁。
［異同］『新編国歌大観』「夢—草」「世々—代代」。『蒙求』「呉録—呉書」「夢三松生二スト其ノ腹ノ上一ニ—夢松樹生其腹上」

「后―後」。

［訳］　松

丁固のように私も今年、松が腹の上に生えた夢を見た。丁固はその夢解きの通り、十八年後に三公になったが、世の中はすっかり変わってしまったから（私の夢は叶うか）なあ。

蒙求によると、『呉志』では丁固は孫皓に仕えて司徒（丞相）となった。『呉録』によると、初め彼が尚書（書奏を司る官）だった時、松が腹の上に生えた夢を見た。そこで、彼はその夢を解いて人に、「松の字は偏と旁を分解すれば十八公となる。故にこの松の夢は、十八年経つと自分が三公となる正夢であろう」と語った。遂にその夢の通り、三公の一である司徒となった。

［考察］松の字を分解すると「十」「八」「公」になり、十八年後に三公になることを示す。当歌は、自分も丁固のように松の夢を見たが、故事のように昇進するかどうか訝ったもの。

（増井里美）

松葉不失

611露霜の松やふりせぬ深みとり正木のかつらいく世かけても

古今集序。松の葉のちりうせすして、正木のかつらなかくつたはり云々。

［出典］雪玉集、二二六二番。古今集、仮名序、三〇頁。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　松葉は失せず

露や霜が降りかかっても古くならない松葉の深緑は、正木の葛が伸び続けるように、どれほど時が経っても変わら

ないものだ。

古今集の仮名序。松の葉が散り失せず、まさきの葛が長く伸びるように長く後世に伝わり云々。

［考察］典拠は『古今集』がこの後も永く受け継がれていくことを願う箇所。「ふる」は露が落ち霜が降りるの「降る」と、時が経ち松の葉が古くなるの「古る」を掛ける。

（玉越雄介）

竹

612きかてやは世に顕れんいか計声のあやなす竹はありとも

風俗通曰、笛ノ之所レ出有二雲夢ノ之竹、衡陽ノ之幹、柯亭ノ之竹一云云。

白氏六帖曰、蔡邕宿二柯亭一々屋以レ竹為レ椽。盻テ曰、「真良竹也」。取以為レ笛音声妙絶ナリ。

［出典］雪玉集、二九四二番。円機活法、一七巻、音楽門、笛。白氏六帖事類集、巻第一八、知音門。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『円機活法』「宿二柯亭一々屋—宿二於柯亭之館」「盻テ曰、真良竹—盻ンテ之曰良竹」「妙絶ナリ—独絶」。『白氏六帖事類集』「盻テ曰真良竹—邕盻之曰良竹」「取以為レ笛音声妙絶ナリ—遂請為笛」。

［訳］　竹

どれほど美しい音色を奏でる竹があっても、（それを蔡邕のように見つけて笛にして）聞かなければ、（名器は）この世に現れないであろう。

風俗通義によると、笛の材料としては雲夢の竹、衡陽の幹（しのだけ）、柯亭の竹がある云々。

白氏六帖によると、蔡邕が柯亭に宿泊した際に、宿の屋根の椽（たるき）に立派な竹材が用いられているのを

発見し、竹を睨んで「真に良い竹だ」と言った。その竹を取り笛を作って吹いてみると、素晴らしい音色がした。

［考察］風俗通は後漢の応劭の著『風俗通義』の略。白氏六帖は『白氏六帖事類集』の略で、白居易が撰述したとされる全三〇巻の類書。雲夢、衡陽、柯亭は中国の地名で、笛の材料になる竹の名産地。

（玉越雄介）

宮樹影相連

613雨そゝき秋の時雨とふる宮の木のした道そわけんかたなき

蓬生巻云、あれたる家の、木立しけく森のやうなるを過たまふ。おほきなる松に藤の咲かゝりて月かけになひきたる、風につきてさと匂ふかなつかしく、そこはかとなきかほり也。橘にはかはりておかしけれはさし出たまへるに、柳もいたうしたりて、ついひちもさはらねは、みたれふしたり。見し心地する木立哉とおほすは、はやう此宮なりけり云々。中略　御さきの露を馬のむちしてはらひつゝ入奉る。雨そゝきも、秋の時雨めきて打そゝけは、「御笠さふらふ。けに木の下露は雨にまさりて」と聞ゆ。御さしぬきのすそはいたうそほちぬめり。

［出典］雪玉集、三一三〇番。源氏物語、蓬生巻、三四四頁、三四八頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『承応』「なひきたる―なよひたる」「秋の時雨―なを秋のしぐれ」。『湖月抄』「秋の時雨―なを秋のしぐれ」。

［訳］　宮の樹の影が連なる

秋の時雨のように雨の雫が降り、荒れ果てた宮へ向かう木陰の道は跡形もない。

蓬生の巻によると、荒れている家で、木立が茂って森のようになっている所をお通り過ぎになる。大きな松に藤が垂れさがって咲きまつわり、月光のなかになよなよ揺れている、それが吹く風ともにさっと匂ってくるのが懐かしく、どことなくほのかな香りである。橘の香とはまた異なった風趣なので、（光源氏は）車から身を乗り出して御覧になると、柳の枝がたいそう長く垂れて、築地も崩れて、乱れかかっている。見たことのある木立だとお思いなさるのも、これこそこの宮（常陸宮）なのであった云々中略。（惟光は）お足元の露を馬の鞭で払い払い、（光源氏を）お入れ申しあげる。雨の雫が、やはり秋の時雨のように降りかかるので、「お傘がございます。なるほど木の下露は、雨にまさるものでございまして」と申しあげる。御指貫の裾はぐっしょり濡れてしまったようである。

［考察］『源氏物語』は、光源氏が花散里を訪ねる途中に、すっかり荒れ果てた常陸宮邸（末摘花の邸宅）を目にする場面と、その屋敷に入る光源氏と惟光を描いた場面。当歌は第三句の「ふる」に、「降る」と「古」を掛ける。

（太井裕子）

蓬

614 柏 すむやいかに松の木たかくなる陰を軒にあらそふ蓬生の宿

蓬生の巻。よもきは軒をあらそひておひのほる云々。

［出典］柏玉集、一六一二番。源氏物語、蓬生巻、三二九頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　蓬

どのように住むのだろうか。松が高く生えている木陰で、軒と争うまで蓬が生え上がっている荒れ果てた住まいに。

蓬生の巻。蓬は軒と争うまで高く生えあがる云々。

［考察］『源氏物語』は、光源氏の訪れがなくなった常陸宮邸が荒れ果てていく場面。

（永田あや）

名所鶴

615 同 妹にこひたか心とかなく鶴もつまよひわたるわかの松原

万葉集、六。妹尓恋吾乃松原見渡者潮干乃滷尓多頭鳴渡（ワカ シホヒノカタニタヅ）新古今入

［出典］柏玉集、一六一九番。万葉集、巻六、雑歌、一〇三〇番。

［異同］『新編国歌大観』「よひわたる―恋ひわたる」。『万葉集』ナシ。

［訳］　名所の鶴

妻を恋しく思い、その気持ちを誰の心と思ってか、鶴も妻を恋しく思い、鳴き続けているのだろうか。わかの松原で。

万葉集、巻第六。妻（光明皇后）を恋しく思い、わかの松原を見渡すと、潮が引いた遠浅の所に鶴が鳴き渡っていく。新古今集に入る

［参考］『万葉集』の和歌は天平一二年（七四〇）、聖武天皇が伊勢国に行幸されたときの御製。『新古今集』（巻一〇、羇旅、八九七番）に所収。

鵜

616わたつ海を出来し神の名にのこすうのはを人のあたにやはみん

（永田あや）

神代巻曰、故彦火火出見尊已還レ郷、即以二鸕鷀之羽一、葺為二産屋一云云。宜レ号二彦瀲武鸕鷀草葺不合尊一。

［出典］雪玉集、二三〇一番。日本書紀、神代下、一七八頁。［異同］『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「彦瀲武鸕鷀草葺不合尊―彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊」。

［訳］　鵜

海から来た神である豊玉姫は、わが子の名前に残した鵜の羽を、（自分を垣間見た）夫の不誠実と見るだろうか。（いや、夫が造った産屋を踏まえた名前には、豊玉姫の気持ちがこもっているに違いない。）

神代巻によると、そこで彦火火出見尊は、故郷に帰り、鵜の羽で屋根を葺いて、産屋をお造りになった云々。「彦瀲武鸕鷀草葺不合尊と名付けなさいませ」（と豊玉姫は彦火火出見尊に申しあげた）。

［考察］『日本書紀』は、彦火火出見尊が豊玉姫の出産のために鵜の羽で葺いた産屋を造った場面と、産まれた子が彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と名付けられた場面。当歌は、産屋の屋根が葺き終わる前に豊玉姫が中に入って出産した際、八尋大鰐に化身しているのを彦火火出見尊に見られ、恥じて海に帰った話も踏まえている。

（永田あや）

鴿

617山碧ふかみ雨よりのちになく鳩の妻よふ声そさらにさひしき

『三玉挑事抄』注釈　雑部（二）

埤雅。見于春部。

［出典］碧玉集、一二四〇番。埤雅、釈鳥、鶻鳩。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　鴿（どばと）

山深いので、雨が止んで後に鳴く鳩の妻を呼ぶ声はいっそう寂しい。

埤雅。春部に見える。（42番歌、参照）

［考察］『埤雅』は、晴れた時に鳩が妻を呼ぶことを記した部分。当歌は山奥で鳩が妻を呼ぶ声を聞くと、寂しさが増さると詠んだもの。

［参考］42 柏玉 折しもあれ花に雨よふ鳩の声も色なき竹のおくのさひしさ　埤雅云、鵓鳩陰ル時ハ則遅ニ逐其ノ婦一ヲ、晴ル時ハ則呼レ之ヲ。語ニ曰、天将レ雨ント鳩逐レ婦。

（梅田昌孝）

鳥

618 おもへ人よく物いふといふ鳥もこゝろなき鳥の名をやはなるゝ

曲礼曰、鸚鵡能ク言ヘトモ不レ離ニ飛鳥一。

［出典］雪玉集、三八四八番。礼記、曲礼上。［異同］『新編国歌大観』『礼記』ナシ。

［訳］　鳥

人々よ、考えてみなさい。人語を話す鸚鵡という鳥も、風流心のない鳥という名から離れるだろうか。

曲礼によると、鸚鵡はしゃべることができても、鳥類を離れない。

［考察］人語を言う鸚鵡も鳥類であることに変わりはない、と述べた『礼記』を踏まえて、当歌も風流心を解さない鳥類にしかすぎないと詠んだもの。

（梅田昌孝）

619 柏

うらやまし鳥すらむはらからたちのさかしき世には住んともせす

後漢書曰、考城ノ令王一渙、署レ覧為二主一簿一ト、謂曰、「主簿問二陳元之過一、不レ罪而化レ之ヲ。得レシヤ無レコトヲ少二鷹一鸇之志一ヲ耶」。覧曰、「鷹鸇ハ不レ如二鸞鳳一」、渙謝シ遣シテ曰、「枳一棘ハ非二鸞鳳ノ所レ棲、百里豈二大賢ノ之路ナランヤ」云云。

［出典］柏玉集、一六三〇番。後漢書（吉川忠夫訓注、岩波書店、二〇〇五年）、循吏列伝第六六。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『後漢書』「考一城ノ令王一渙—考城令河内王渙、政尚厳猛、聞覧以徳化人」「署レ覧為二主一簿一ト—署為主簿」「謂曰—謂覧曰」「主簿問二陳元之過一—主簿聞陳元之過」「覧曰、鷹鸇ハ不レ如二鸞鳳一—覧曰以為鷹鸇不若鸞鳳」。

［訳］（鳥）

うらやましいなあ。鳳凰でさえ、茨やからたちのような険しい世には住もうともしない。

後漢書によると、考城の長官である王渙は、覧を主簿（帳簿を管理して庶務を司る官）にした。王渙が（覧に）言うことには、「主簿は陳元の過ち（不孝）を聞き、罰せずに従わせた。猛禽のような志を欠いている」と。覧は、「思うに、猛禽は神鳥（鳳凰）に及びません」と言った。王渙は、覧を主簿の職から引き取らせて、「いばらは神鳥の住むところではない。百里（王渙と覧が働く県の譬え）はどうして優れた賢人の道であろうか、いやそんなはずはない」云云。

［考察］『後漢書』循吏列伝の「循吏」とは、法に忠実でよく人民を治める役人のこと。ここは仇覧の才知溢れる発言に王渙が感服した場面。当歌は王渙の発言「枳棘ハ非二鸞鳳ノ所一レ棲一」により、鳳凰すら住まない過酷な世に暮らさなければならない人の運命を嘆いたもの。

（山内彩香）

620 碧おさまれる道をしるてふ鳥も今あらはれぬへき時やきぬらむ

格物論。見于桐歌註。

［出典］三玉和歌集類題、鳥。［異同］『三玉和歌集類題』ナシ。

［訳］（鳥）

国が穏やかになる道を知るという鳳凰も、今まさに現われる時が来たのだろうか。

格物論。桐の歌の注に見える（604番歌、参照）。

［考察］歌中の「鳥」は桐に住み、良い政治が行われる瑞祥として現れるという鳳凰。格物論とは『古今合璧事類備要』にある、宋代の謝維新選の百科事典の類で、内容は天文・地理から君道・臣道、鳥獣、香茶など多岐にわたり、各項目に「格物総論」という説明が付されている。

（山内彩香）

621 おやを思ふ心わするなからすてふ鳥もむは玉のよはになくなり

張華禽経曰、慈烏ハ孝一鳥、長スル時ハ則反二哺スル其ノ母一二。

慈烏夜啼、白居易。慈烏失二其ノ母一ヲ。唖々トシテ吐二哀音一ヲ。昼夜不飛去一。経レ年守二故林一。夜々夜半二啼ク。聞ク

者為ニ沾レス襟ヲ。下略

［出典］雪玉集、二二七八番。張華禽経（四庫全書）、六八〇頁。白氏文集（白楽天全詩集1）、八〇頁。

［異同］『新編国歌大観』『禽経』『白氏文集』ナシ。

［訳］　（鳥）

親を思う心を忘れるな。烏という鳥も夜半に（亡き母を偲んで）鳴くそうだ。

張華禽経によると、慈烏は孝の鳥である。成長すればその母を養う。

「慈烏夜啼」白居易。慈烏がその母の死にあい思慕して哀鳴し、昼も夜も飛び去らない。年を経ても住み慣れた林を去るに忍びず、毎夜夜半になると哀しみ鳴くので、聞く者はみな涙を流した。下略

（山内彩香）

竹裏雀

622柏 村すゝめわか家はとの陰しむる竹をあらそふ夕くれのこゑ

夕顔巻の詞、春部に見えたり。

［出典］柏玉集、一〇六八番。［異同］『新編国歌大観』「こゑ―空」。

［訳］　竹やぶの裏にいる雀

夕暮れになると、群がっている雀とわが家の家鳩とが、竹やぶの陰で（今夜のねぐらを）取り合って争っている声が聞こえる。

夕顔の巻の言葉は、春の部に見えている。

『三玉挑事抄』注釈　雑部（二）

［考察］「夕顔巻の詞、春部に見えたり」とあるが、本書の四季の部には見当たらない。当歌の内容からすると、「竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴くを聞きたまひて」（源氏物語、夕顔の巻、一八七頁）が出典であろう。

（藤原崇雅）

河辺鳥

623 同 こゝにかもわたすかいかに宇治川のすさきにたてる鵲のはし

浮舟巻云、さむき洲さきにたてる鵲のすかたも、所からはいとおかしう見ゆるに、宇治橋のはる〳〵と見わたさるゝに。

［出典］柏玉集、一六二二番。源氏物語、浮舟巻、一四五頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　河辺の鳥

宇治川の洲崎にたたずむ鵲は、ここにも橋をどのようにして渡すのだろうか。

浮舟巻によると、寒々とした洲崎にたたずむ鵲の姿も、場所が場所とて風情のある眺めであるが、宇治橋がはるか遠くまで見渡されるところへ。

［考察］浮舟の巻は、浮舟が匂宮との関係が露見してしまうことを恐れながら薫と逢っている場面で、宇治河畔の情景を描写した部分。当歌は、七夕の日にだけ天の川に鵲の橋が架けられ織姫と彦星が出会うこと、また宇治橋が何度も掛け直されたことも踏まえている。

（増井里美）

虫

624 程〳〵にみるそかなしき蛛のゐのそれにもかゝるむしのいのちよ　同

勝非録曰、王守一自称中南山布衣、売薬於洛陽市。嘗携一柱杖。毎見蛛網必以杖毀裂尽争、而后已。或問之曰、「天地之間飛走之属捕逐搏撃、固非一物。均為口腹、以養性命。独蜘蛛結網帳羅、設机巧以害物命。吾是以悪之」云云。見于活法、蜘蛛部。

［出典］柏玉集、一六三六番。円機活法、二四之巻、昆虫門、蜘蛛部。

［異同］『新編国歌大観』「みるそかなしき―みるにはかなし」、「蛛のゐの―蛛のいの」。『円機活法』「勝非録曰―勝非録」「中南山―中山」「嘗携―携」「独蜘蛛―独蛛」。

［訳］　虫

どの虫を見ても悲しいなあ。蜘蛛の巣にも掛かる虫の命よ。

勝非録によると、王守一は自ら中南山の布衣（平民）と称し、薬を洛陽の市に売る。かつてより一柱の杖を携えている。蜘蛛の巣を見るたびに、必ず杖で払い尽くし争って、そののちに止める。ある人がこの振る舞いについて問うと、答えて言うには、「この世の生物は全て他の生物を捉え捕まえていて、それは蜘蛛に限ったことではない。全ての生物は均しく口腹を満たし、命を養っている。ただ、蜘蛛のみが糸を張り巣を巧みに作り、他の生物の命を害している。私はそういう訳で蜘蛛を憎んでいるのだ」云云。円機活法の蜘蛛の部に見える。

（藤原崇雅）

熊

625しらしかし只いたつらに狩人の熊にもあらぬえものありとも

六韓曰、文王将レ田セント。史編布レ卜ヲ曰、「田リセハ二於渭陽一ニ、将二大エモノアラント得一焉。非レ龍、非レ麗、非レ虎、非レ熊。兆得ン二公侯一ヲ」。

［出典］雪玉集、二三〇七番。蒙求、呂望非熊、一五〇頁。

［異同］『新編国歌大観』「しらしかし―しらじらし」。『蒙求』「熊―羆」。

［訳］　熊

知らないだろうよ。ただむなしく狩りをする人に、熊でもない獲物があったとしても。

六韓によると、周の文王が猟に出ようとし、太史の編が亀の甲を並べ焼き、占って申しあげた。「渭水の北に狩りをすれば、大きな獲物があろう。しかし、それは龍でもなくみずちでもなく、虎でも熊でもない。（割れた形によれば）公侯たる人物を得るであろう」。

［考察］当歌は文王が狩で公侯を得たように、意外な獲物があっても気づかない狩人を詠んだもの。

（藤原崇雅）

牛

626時ならてあゆく日影をいかにともとふ人なきもうしや世の中

漢書。丙吉伝ニ曰、吉又嘗テ出逢二清レ道群闘者死傷シテ横レ道。吉過レ之ヲ不レ問。掾吏独リ怪レ之ヲ。吉前行逢二人逐レ牛、々喘テ吐レ舌ヲ。吉止駐。使二レ騎吏ヲ問一、「逐レ牛ヲ行コト幾里ソ矣」。掾吏独リ謂ク、丞一相前一後失レ問ヲ。或以譏ルレ吉ヲ。吉カ曰、「民ノ闘相殺一傷、長安ノ令、京兆ノ尹職所レ当二禁備逐一捕一。歳ノ竟ニ丞一相課二シテ其ノ殿最ヲ一奏シテ行二賞罰一ヲ

而已。宰相ハ不レ親ラセ二小事一ヲ。非レ所レ当二於道路問一也。方春少陽用レ事未レ可二太タ熱一。恐クハ牛ノ近行用レ暑故ニ喘ンコトヲ。此時気失レ節、恐クハ有レ所二傷害一也。三公ハ典レ調二和陰陽一ヲ。職所当憂。是ヲ以テ問レ之」。掾吏乃服ス云云。

［出典］雪玉集、八〇六六番。漢書、丙吉伝、六三八頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『漢書』（四庫全書）「太タ熱―大熱」「職所当憂―職当憂」。

［訳］　牛

時節に合わないで揺れる牛の影を、どうしたのだと問う丙吉のような人がいないのも、つらい世の中であるなあ。

漢書の丙吉伝によると、丙吉はまたある時外出し、露払いに先行した者どもが乱闘しているのに行き逢った。死傷者が道に横たわっていたのに、丙吉はその場を通り過ぎて、何ごとも問わなかった。掾吏は密かにそのことを訝った。丙吉が前に進んで行くと、人が牛を追っていて、牛が喘いで舌を吐いているのに出逢った。丙吉は馬をとめ、騎馬の役人に命じ「牛を追って何里来たのか」と問わせた。掾吏は密かに、丞相は、前では問うべくして問わず、後では問わずもがなのことを問い、前後をとりちがえていると思った。丙吉を悪口する者さえいた。丙吉は言った。「民が乱闘して殺傷しあうのは、長安令や京兆尹が職務として、これを禁止防備し追跡逮捕すべきである。丞相は歳末に彼らの殿最（優れた功績とそれ程でもない功績）を評定し、奏上して賞罰を行うだけのことである。宰相たる者は自分自身では小事を手がけず、そうしたことを道路で問うべきではない。今まさに春は少陽の気が支配する時節ゆえ、まだ甚だしい暑さであってはならない。ひょっとすると、牛は近距離を歩んでも暑熱のためには喘ぐかもしれず、これは時候が季節を失しているわけだから、傷害（わざわい）の起こ

ることを恐れるのである。三公は陰陽を調和することをつかさどり、職責上、憂慮しなくてはならぬ事がらであるゆえ、これを問うたのである」と。すると掾吏は丙吉のことばに承服した云々。

［考察］『漢書』は、丙吉が丞相たる自分の職責を弁えていることを称賛した部分。「うし」は「牛」と「憂し」の掛詞。

［参考］『蒙求』「王承魚盗　丙吉牛喘」にも類話が見える。

（増井里美）

淵亀

627淵よりも深しや釣にかゝるかめのはなてるぬしをおもふこゝろは

搜神記曰、毛宝見三人ノ釣テ得二白亀一ヲ、贖テ而放ツ之江中一ニ。宝後為レ将、戦敗テ没レ江。如レ躡二著ヌルカ物ヲ一漸浮テ至レ岸ニ。宝視レハ之ヲ、乃昔日所レ放亀也。

［出典］雪玉集、二三〇二番。事類賦（四庫全書）巻二八。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『事類賦』「毛宝見—毛宝行於江見」「人ノ—漁夫」「白亀ヲ、—一白亀」「贖テ而—宝贖而」「放ツ之江中ニ。—放之」「宝後為レ将—後於郯城」「没レ江—投江」「如レ躡二著ヌルカ物ヲ一漸浮テ—有物載之漸得」「宝視レハ之ヲ、—視之」「昔日—昔」「放亀也—放白亀」。

［訳］　淵の亀

淵よりも深いなあ。釣りにかかって釣られた亀が、自分を放してくれた主人を思う心は。

搜神記によると、毛宝は人が白亀を釣ったのを見て、この亀を買って江に放してやった。毛宝が後に将とな

り、戦に敗れて江に没したとき、足が着いて物を踏んだようになり、だんだんと浮き上がって岸にたどり着いた。毛宝がこの踏んでいた物を見ると、それは昔放してやった亀であった。

［参考］「捜神記曰」とあるが『捜神記』に毛宝の話はない。『捜神後記』巻一〇に類話があるが、本文異同が多い。この部分に最も近いのは『事類賦』（631番歌、参照）に引かれた『捜神記』の記事である。なお、『蒙求』の「楊宝黄雀　毛宝白亀」にも類話が見え、『蒙求』の古注は『捜神記』を出典とする。また、『和漢朗詠集』下、白、八〇〇番にも「毛宝亀帰寒浪底」とある。

（増井里美）

虎

628碧　まことなき世のことはりをしらせてや市なるとらの名には立らん

韓非子。龐共与二太子一質タリ二於耶鄲一ニ。謂二魏王一曰、「今一人言ハ市ニ有リレ虎、信センカ乎」。曰、「否（イナ）」。「二人言ハ信センヤ乎」。曰、「否」。「三人言ハ、王信センカ乎」。曰、「寡人信センカ之ヲ」。龐共曰、「夫レ市ニ無キハレ虎明カ也矣。而シテ三人言ヘハ成二市虎一ヲ。願クハ王察セヨ之ヲ」。

［出典］碧玉集、一二四五番。韓非子、上、内儲説上、七術第三〇、三八九頁。円機活法、二四巻、走獣門、虎。

［異同］『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

［訳］　虎

誠意がないこの世の中の道理を知らせるために、市場に虎がいるという評判がたつのだろうか。

韓非子。龐恭は太子とともに趙の都邯鄲へ人質となった。（出発の前に）龐恭が魏の王に「今、一人が市場に

虎が出たと言ったらあなたは信じますか」と申し上げると、王は「信じない」と答えた。「二人が言ったら信じますか」と聞くと、「信じない」と答えた。「三人が言ったなら王は信じますか」と聞くと、「信じるだろう」と答えた。そこで龐恭は「そもそも市場に虎が出てこないことは明らかです。しかし、三人がそのように言えば市場に虎が出たことになります。願わくば王はこのことをお察し下さい」と言った。

［考察］『円機活法』の本文は『韓非子』の内容を要約したもの。『韓非子』では邯鄲から戻った龐恭が、魏王の近臣たちの讒言によって遠ざけられてしまった、と続く。「市に虎を成す」とは実際には起こり得ないことでも、複数の人が同じことを言えば現実になってしまうという例え。

（玉越雄介）

馬

629 同 老にける手馴の駒は道ならぬ人のこゝろもしると見えつゝ

管仲隋馬、註于冬部。

［出典］碧玉集、一二四六番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　馬

飼いならした老馬は、道から外れた人の気持ちも知っているように見えることよ。

管仲隋馬の故事は、冬部に注した。（300番歌、参照）

［考察］「管仲隋馬」は『韓非子』『蒙求』に見られる故事で、管仲が道に迷った時に、老いた馬を先に進ませることで、その智を用いて帰路を見出したという話。当歌は人の道から外れ迷っている者の道案内も、老馬にしてもらい

たいと詠んだもの。

［参考］行路雪　300碧かち人は思ひたえねと降つもる雪こそ駒の道しるへなれ

韓非子、斉ノ桓公伐二孤竹一ヲ春往冬還迷惑シテ失レ道ヲ。管仲曰、老馬之智可レ用。乃放二老馬一而隨之遂ニ得レ路ヲ。

（玉越雄介）

630柏千里をも行より名にや龍の馬雲にものほる道はしるらん

爾雅曰、馬高八尺以上為レ龍。

雑説。世有伯楽。然後有千里馬。

［出典］柏玉集、一六三一番。爾雅、釈畜。文章規範、雑説、三四〇頁。

［異同］『新編国歌大観』『文章規範　下』ナシ。『和刻本辞書字典集成　爾雅注疏』「八尺以上為レ龍―八尺シテ為レ駿」。

［訳］　（馬）

龍の馬は千里をも走れるから、名声が立つのであろうか。そのような名馬は、雲の上にも上る道を知っているであろう。

爾雅によると、馬の八尺以上を龍と為す。

雑説。世の中には伯楽がいるからこそ、千里を走る名馬が存在するのである。

［考察］西晋の郭璞『爾雅』は中国最初の辞書で、北宋の邢昺『爾雅注疏』はその注釈書。「雑説」は唐代の詩人、韓愈の作。当歌は第三句の「龍」に「（名が）立つ」を掛ける。

（永田あや）

牛

631 同 かしこしな水のにこりの世をうしと引かへす名は人にのこりて

逸士伝曰、堯譲二天下一ヲ於許由一々々逃レ之。巣父聞レ之ヲ洗二其耳ヲ。樊仲文牽レテ牛ヲ飲レ之ヲ、見二テ巣父ヲ洗レ耳ヲ、乃駆レテ牛ヲ而還ル。耻レ令二シテ牛ヲ飲一其ノ下流ヲ也。

［出典］柏玉集、一六三四番。事類賦（四庫全書）、巻七、地部。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『事類賦』「於許由一々々—于許由由」「巣父聞レ之ヲ洗二其耳ヲ—巣父聞而洗耳于池濱」「樊仲文—樊監字仲文」「牽レテ牛ヲ飲レ之ヲ見二テ巣父ヲ洗レ耳ヲ乃—方飲牛」「駆レテ牛ヲ而還ル—乃駆而還」「其ノ下流ヲ也—其洗耳之下流」。

［訳］　牛

賢いことだなあ。水が濁るように汚濁している世を辛いと思って、牛に水を飲ませず引き返したその名声は人々の間に残って。

逸士伝によると、堯が自分の天下を譲ろうとしたので、許由は世を逃れた。巣父はこれを聞いてその耳を洗った。樊仲文は牛を牽いて水を飲ませたところ、巣父が耳を洗っているのを見て、すぐに牛を駆り立て帰り、その下流の水を牛に飲ませたことを恥じた。

［考察］西晋の皇甫謐『逸士伝』は隠者伝で、原文は散佚。北宋の呉淑撰註『事類賦』は、詩文の典拠を注した類。当歌は第三句の「うし」に「牛」と「憂し」を掛ける。

（永田あや）

632 柏
いにしへの春にかへらぬ世をうしと花のはやしのかけやこふらん

書。武成。放二牛ヲ于桃林ノ之野一示二天下弗レ服。

［出典］柏玉集、一六三五番。書経、武成、四七一頁。［異同］『新編国歌大観』『書経』ナシ。

［訳］（牛）

昔の春に帰ることのない世がつらくて、牛は桃花の林の幻影を恋しく思っているのだろうか。

書経。武成。牛を桃林の野に放って、天下にもはや用いないことを示した。

［考察］『書経』は牛を桃林の野に放ち、戦に用いないことを記した部分。当歌は、戦のない平和な世を恋しく思う牛の心情を詠んだもの。当歌は第三句の「うし」に「牛」と「憂し」を掛ける。

（梅田昌孝）

虎

633 分いれは世のつねならす山風もはけしきとらのかくれてや住

格物論曰、虎山一獣ノ之君状チ如レ猫大サ如二黄牛一云云。百一獣為レニ之ノ震一恐風一従テ而生ス。

淮南子。虎一嘯テ而谷一風至リ龍一挙而景一雲属。

［出典］雪玉集、一三〇九番。円機活法、巻二四、走獣門。淮南子、天文訓、一三四頁。

［異同］『新編国歌大観』『円機活法』『淮南子』ナシ。

［訳］虎

分け入ってみると、尋常ではないほど山風も激しく吹くが、どう猛な虎が隠れ住んでいるのだろうか。

格物論によると、虎は山に住む獣の君主であり、その姿形は猫のようで、大きさはあめ牛のようである云云。多くの獣は虎を震えて恐れ、虎が動くとそれに従って風が吹いた。

淮南子。虎が嘯くと谷風（東風）が吹き、龍が天に上ぼると瑞雲があつまる。

［考察］当歌は第四句の「はげしき」に、山風が激しいと激しい虎を掛ける。

（梅田昌孝）

別

634おもひをけひと日も見ぬは幾秋の露をかけ来し袖のわかれを

詩、采葛。彼二采レ蕭兮、一日不レレハ見、如二三一秋一兮。

［出典］雪玉集、三七四七番。詩経、采葛、一一〇〇頁。［異同］『新編国歌大観』『詩経』ナシ。

［訳］　別れ

覚えておいてください。一日でも会わないと、幾度も秋を重ね沢山の露で袖が濡れるように、流し続けた涙で濡れた袖との別れを。

詩経、采葛。あそこにカワラヨモギを採ってきます（を口実にして出かけたが彼はいない）。一日会えないだけで、まるで秋を三度重ねたように感じる。

［考察］『詩経』は「一日三秋」の基となった詩で、「三秋」の解釈は三か月、九か月、三年など諸説ある。当歌はこの詩を踏まえて、後朝（きぬぎぬ）の別れを詠んだ女歌。

（山内彩香）